宇陀を駆けた人々 14

―高山右近（うこん）篇 2―

右近の受洗

澤氏は伊那佐山から南東にのびる標高約538mの山頂を中心に山城（澤城）を築きました。また、麓の集落内には、澤氏などの居館（下城）などがありました。

高山友照（ともてる）（右近の父）が城主になってからの澤城の様子は、ポルトガルの宣教師・ルイス＝フロイスの『日本史』から知ることができます。その一部を要約してご紹介しましょう。

「澤城は高い山の上にあり、遠くまで眺望でき、城内には、知照（別名：図書（ずしょ））の妻子や約300人の兵たちが住んでいる。小さな砦には、長さ20メートル弱、幅7メートル余りの教会が建てられており、中には礼拝堂・香部屋・宣教師の宿泊部屋・従者の間などの施設がある。これらは、杉材造りで、たいそう良く出来ている。城主の友照は、毎朝、この教会で熱心に礼拝を行っている。一方、伊賀へと逃れた澤氏は、澤城を奪還しようと企てており、澤城では、昼夜不断の用心深い見張りがなされており、城門も設けられている。」などとあります。教会は、本丸に近い所に建てられたのでしょう。

永禄7年（1564）、友照は、宣教師を澤城に招き、右近をはじめとする家族、家臣ら150人がキリスト教の洗礼を受けました（永禄6年説もあります）。この時、右近には、ポルトガル語で、「正義の人、義の人」を意味する「ジュスト」（ラテン語ではユスト）という洗礼名が与えられました。友照の信仰がこれからの右近の人生に大きく影響します。

当時の世界地図（東アジア図など）には、近畿・中国・四国・九州地方が描かれ、近畿には「Ｓａｗａ」（澤）という地名が記されています。友照・右近らのキリスト教の信仰が大変熱心だったので、宣教師たちも注目したのでしょう。

文・柳澤一宏（文化財課）

人権コーナー

共に生きる社会

平成30年版の障害者白書によると日本では14人に1人、7.4％の人が体や心に機能の障がいがある人がいると言われています。

体の内部の病気や障がい、心の病など、外見では分かりにくい病気や障がいの人もおられ、公共の乗り物で優先席を使っていると「健康なのに、若いのに」と誤解され注意されるなど周囲の理解を得られず、つらい思いをしている人たちがいます。

例えば、うつ病はどうでしょう。気分がひどく落ち込んだり、何事にも興味を持てなくなったりする病気です。それまでやっていた家事や仕事ができなくなり、周囲から「怠けているのでは？」と誤解されることもありますが、それは病気によるもので、甘えや怠けではないのです。

そのような症状に苦しみながら「家族に申し訳ない」と自分を責め、「もう治らないのでは」という不安を抱えながら日々過ごしている本人が、一番つらいのです。

また、私たちは、地域社会の一員として、他者と関わり合いながら日常生活をおくっていますが、うつ病の人は自分の考えや感情のコントロールが難しいため、何気ない言葉が深く心に刺さり、病状を悪化させ、時には生命に関わる結果を招いてしまうこともあり、励ましの言葉でさえ逆効果になることもあるのです。

病気や障がいは、体の状況変化や事故などにより誰にでも起こり得ることで、決して他人事ではないのです。

人と人とのつながりで創る地域社会、私たちには、さまざまな人の痛みやつらさを自分に置きかえて感じられる力を身に付けることが求められています。誰もが暮らしやすい共生社会、この実現に向けて、日々意識し、病気や障がいなどの理解を深めていくことが必要ではないでしょうか。